

鯨 研 通 信

第 330 号

1979年10月

財団法人 日本鯨類協会 鯨類研究所 〒135 東京都江東区越中島1丁目3番1号 電話 東京 (642) 2888 (代表)



太平洋西部低緯度海域，ソロモン海，サンゴ海，アラフラ海，チモール海およびインド洋における小型歯鯨類の目視調査結果について

遠洋水産研究所 正 木 康 昭¹⁾
北海道大学水産学部 加 藤 秀 弘²⁾

はじめに

昭和53年度冬期の北太平洋低緯度海域における鯨類目視・標識調査の結果については「鯨研通信」第324号(1979年4月)で既に報告したが、その内で、小型歯鯨類については未報告に終わっていたので、ここに改めて標題のごとく小型歯鯨類の目視調査結果を報告する。

これらの調査は日本沿岸海域に來遊するいろいろな種類の小型歯鯨の群と低緯度海域に分布するものとの間の関係を知る上にも重要であるが、南北両太平洋の西部低緯度海域からの小型歯鯨類の目視と捕獲の報告が現在まで多くあるとは言えない。この報告が、今後これから述べる海域での小型歯鯨類の目視および捕獲調査の一助にでもなれば幸いである。

発見鯨種と発見位置

小型歯鯨類に対する目視調査は大型鯨に対するのと同様の内容で行われた。本通信第317号にも記載したが、調査項目は発見群毎に群番号、発見日時分、発見位置、鯨種、群構成頭数と体長組成、発見鯨の船首からの角度と距離、遊泳方向、逃走方向、天候、視界、風力、表面水温の以上12項目であった。

群を発見したら直ちに追尾にかかり、できる限り群に近づき、肉眼と双眼鏡を併用して当直者全員で観察し、鯨種の判定を行った。

鯨種の判定は「鯨類・鯨脚類」(西脇, 1965), 「Report of the Meeting on Smaller Cetaceans. Montreal, April 1-11, 1974」(Ed. E. Mitchell,

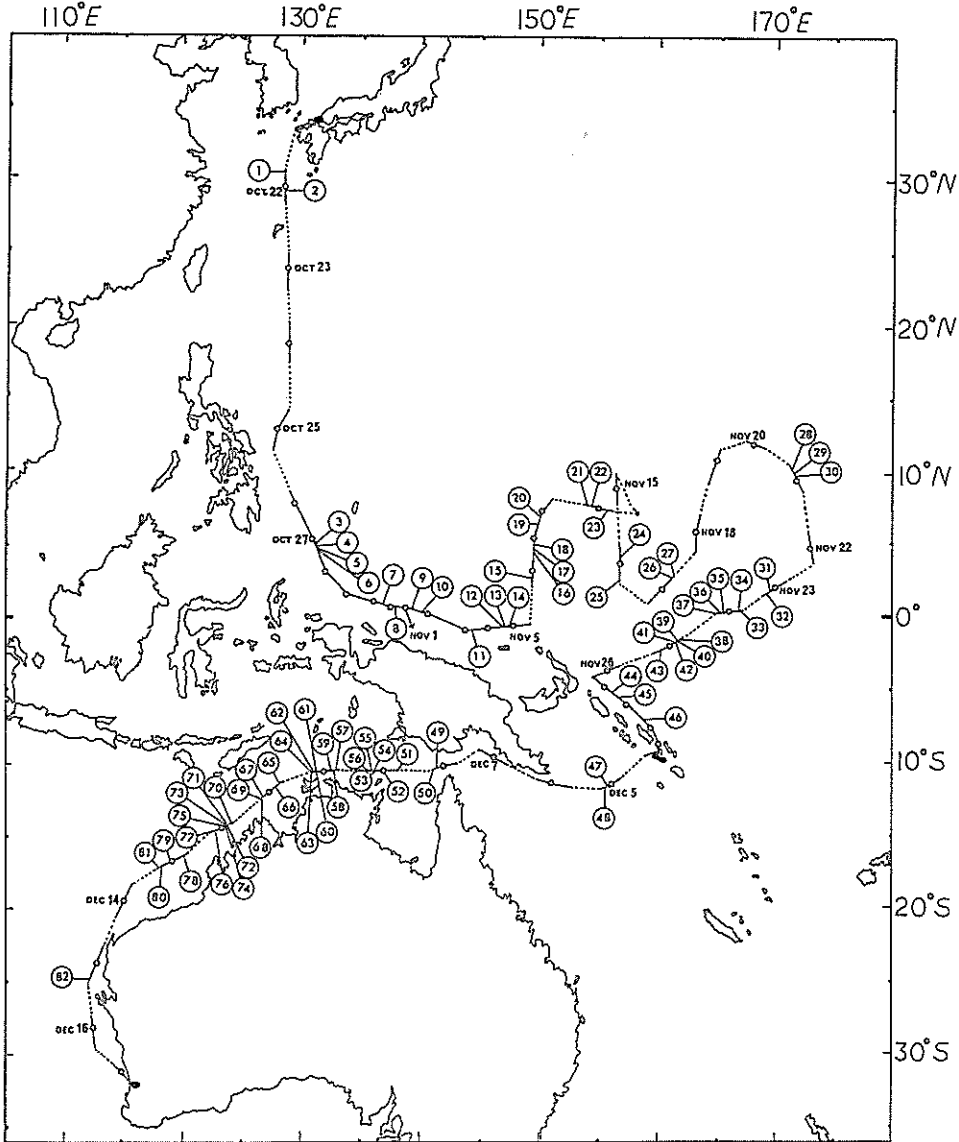
1975), 「The Whales, dolphins, and porpoises of the Eastern North Pacific. A guide to their identification in the waters」(S. Leatherwood, *et al.*, 1972), と「Whales, Dolphins, and Porpoises of the Western North Atlantic. A Guide to their Identification」(S. Leatherwood, *et al.*, 1976) の4冊を用いて行った。

しかしながら、ハンドウイルカを除く他の全ての発見鯨は船に付かず、追尾すると遊泳スピードを早めて数群あるいは散を乱して逃走し、また体長が2m以下の小型個体のもや、海面から鯨体をほとんど出さずに背鰭で水を切るように全速で逃走するものなどがあり、追尾を続けても鯨種の判別が不可能に近い場合が間々あった。これらの種については「種不明」とし、できる限り目視観察結果を記録するように心懸けた。

第1図には調査航跡、調査月日そして小型歯鯨類の発見位置(発見群番号を航跡上に○印の中にアラビア数字で①から⑳まで示した)の概略を示した。発見群番号②と③、⑦と⑧、⑩と⑪、そして⑮とフリーマン港の間の海域で発見が少なかったのは悪天候に大きく影響されたものと考え(本通信第324号参照)。

本通信第324号の第2表に示したごとく、10月21日から11月24日までの北太平洋海域においては〔マヌス島北側の南緯の海域を除く、(492マイル、6群110頭)〕調査航走距離3,678.5マイルで36群1,305頭が発見され、100マイル調査航海当りの発見群数と発見頭数は各々1.0群、35.5頭であり、赤道以南の海域(南太平洋、ソロモン海、サンゴ海、アラフラ海、チモール海そしてインド洋)における11月2日—11月5

1): 現在 南西海区水産研究所内海資源部, 2): 現在 鯨類研究所



——：調査航跡 ：夜航海 ○：発見群番号

第1図 小型歯鯨類の発見状況

日そして11月25日—12月18日までの3,363マイルに亘る調査航走中に61群3,159頭を発見した。調査航走100マイル当りの発見群数と発見頭数はそれぞれ1.8群と93.9頭となり、赤道以南の海域における100マイル調査航海当りの発見群数と発見頭数は北太平洋のそれらの各々1.9倍、2.7倍の高密度で小型歯鯨類が分布していたことを示している。

今航海全体としては、100マイル当り調査航走当りの発見群数および発見頭数は各々1.4群と63頭であった。

第1表は北太平洋と赤道以南の2つの海域に大別した鯨種別の群構成頭数と平均群構成頭数を示した。

北太平洋ではハンナイルカ(群番号④⑤⑥⑧⑨⑩⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿)、マダライルカ(④⑤⑥⑧⑨⑩⑬⑭⑮⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿)、マイルカ(①②③)、ハナゴンドウ(㉑㉒)、マゴンドウ(⑦⑧)、オキゴンドウ(㉑㉒㉓)の7種類が、そして赤道以南の海域ではハンナイルカ(⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿)、マダライルカ(⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿)、ハンドウイルカ(㉑㉒)

第1表 発見群別群構成頭数

鯨 種	北 太 平 洋			赤道以南の海域				全 域		
	A		B	A		B	A	B		
ハシナガイルカ <i>Stenella longirostris</i>	120/1, 100/1, 50/1, 30/1,	120/1, 60/1, 50/1, 20/1	100/1, 50/1, 30/1, 20/1	66.4	200/3, 40/1, 20/1,	130/1, 30/1, 20/1,	50/1, 30/1, 6/1	47.8	22群 1,256頭	57.1
アヲリまたはマダライルカ <i>Stenella attenuata</i> or <i>S. frontalis</i>	60/1, 50/1, 10/1,	50/1, 20/1, 10/1	50/1, *15/1,	33.1	200/1, 20/1,	50/1, 15/1	50/1,	67.0	13群 600頭	46.2
<i>Stenella</i> spp.	10/1,	6/1		8.0					2群 16頭	8.0
スジイルカ <i>Stenella caeruleoalba</i>	50/1,	30/1		40.0	100/1,	50/1, 10/1		53.3	5群 240頭	48.0
マイルカ <i>Delphinus delphis</i>	50/1,	50/1		50.0					2群 100頭	50.0
ハンドウイルカ <i>Tursiops gilli</i>					1,000/5, 25/2, 15/1, 7/1, 6/1, 5/1	100/2, 20/1, 14/1, 6/1, 5/1,	50/1, 20/1, 10/1, 6/1, 5/1,	58.8	22群 1,294頭	58.8
<i>Tursiops</i> spp.	8/3			2.7	10/1, 1/1	6/1, 5/1,		5.5	7群 30頭	4.3
ハナゴンドウ <i>Grampus griseus</i>	9/1			9.0	40/2,	12/1		17.3	4群 61頭	15.3
マゴンドウ <i>Globicephala melaena</i>	30/1,	20/1,	3/1	17.7					3群 53頭	17.7
オキゴンドウ <i>Pseudorca crassidens</i>	30/1,	7/1,	5/1	14.0					3群 42頭	14.0
ユメゴンドウ <i>Feresa attenuata</i>					450/1, 10/1	10/1, 10/1,	10/1,	120.0	4群 480頭	120.0
アカボウクジラ <i>Ziphius cavirostris</i>	2/1			2.0					1群 2頭	2.0
種不明イルカ					200/2, 10/1, 5/1, 2/1	30/1, 10/1, 5/1, 3/1,	20/1, 5/1,	26.4	11群 290頭	26.4

A : 群構成頭数, B : 平均群構成頭数, * : ハシナガイルカかもしれない。

㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵), ハナゴンドウ (㊶㊷),
ユメゴンドウ (㊸㊹㊺㊻), の 6 種類の 小型 齒 鯨 類 が

目視された。この内、マイルカ、マゴンドウそしてオ
キゴンドウは北太平洋のみで発見され、一方、ハンド

ウイルカとユメゴンドウは赤道以南の海域でのみ目視された。更に、第1表からも判るように、北太平洋ではスジイルカ属とゴンドウクジラ科の種が卓越し、赤道以南の海域ではハンドウイルカ属の発見が顕著であった。もう少し詳しく発見鯨種別に発見時の状況を以下に述べる。

(1) ハシナガイルカ (*Stenella longirostris*)

赤道以北の海域における本種の発見位置は 07°34'N ~ 00°03'N の 131°01'E ~ 169°41'E の範囲にあり、そこでの表面水温は 28.5 ~ 30.2°C (平均 29.2°C) の範囲であった。第1表にも示したように、本種の群構成頭数の範囲は 20 ~ 120 頭 (平均 66.4 頭) であり、正木 (1978) の結果より大きく、宮崎・和田 (1978) のそれよりも小さい。宮崎・和田 (1978) そして正木 (1978) の調査時期は 1 月から 3 月にかけてであり、今回の時期と 3 カ月ほどのずれがあるが、群構成頭数も時期によって変化するのかもしれない興味のあるところであり、今後のより詳しい調査を期待したい。

赤道以南の海域における発見は、南太平洋においては (マヌス島北側海域をも含む) 01°24'S ~ 05°55'S, 147°22'E ~ 162°07'E (⑬⑭⑮⑯) の範囲でなされ、チモール海からインド洋に至るオーストラリア北西岸沖合で、12°10'S ~ 25°23'S の 127°37'E ~ 112°00'E (⑩⑪⑫⑬⑭) の範囲で目視されたが、サンゴ海とアラフラ海における発見は皆無であった。

南太平洋とオーストラリア北西岸沖合海域における発見時の表面水温の範囲は各々 29.1 ~ 29.5°C (平均 29.3°C) と 23.4 ~ 30.2°C (平均 28.7°C) であったが、⑯の値を除くと表面水温の範囲は 29.8 ~ 30.2°C (平均 30.0°C) となり、前者は赤道以北の海域における発見時の表面平均水温 (29.2°C) に近いが、後者は若干高い値を示していることになる。赤道以北と以南の各海域では各々 10°N 以北と 20°S 以南の海域における目視調査が十分なされたとはいえないので、本種の分布域を確定するのは難しい。Perrin (1972, 75, 78), 正木 (1978, 79) そして宮崎・和田 (1978) の目視と捕獲結果を今回の結果に加えてみると、北太平洋の低緯度海域には東端から西端海域まで経度的に広く分布しているといえよう。また、サンゴ海やチモール海のように比較的閉鎖された？ 浅い海では全く発見されていないのも 1 つの特徴といえよう。

赤道以北および以南の各海域における発見群に対する親仔を含んだ群の割合は各々 11 群中 3 群 (27.3%) [⑩⑪⑫] と 11 群中 7 群 (63.6%) [⑬⑭⑮⑯ (3 群) ⑰

⑱⑲] であった。しかしながら、南太平洋海域では 4 群中 1 群 (25.0%) [⑳] のみであった。発見群に対する親仔を含む群の占めるこの割合は赤道以北の海域の値に近いが、オーストラリア北西岸沖合で発見された 7 群中 6 群 (85.7%) に親仔を含んだものが認められ、南北西太平洋の低緯度海域における本種の発見群に占める親仔を含んだ群の割合はオーストラリア北西岸沖合海域のその約 0.31 倍である。このことから両海域に分布する本種の繁殖時期に相異が存在することを暗示しているといえよう。

㉑はハンドウイルカが本種中に混って発見されており、また㉒はマダライルカと考えられる群と渾然一体となって発見された。

更に、㉓はマダライルカと判定したが、この決定の鍵になったのは体色が全身暗灰色と目視されたため (捕獲したマダライルカを追尾中に観察した体色のパターンと同じであることから) であるが、追尾中にハシナガイルカの特徴である「スピン」行為が観察されており、この点において㉒群はハシナガイルカの可能性を残している。

(2) マダライルカ (*Stenella frontalis*)

マダライルカとアラライルカ (*S. attenuata*) との間の分類学的な問題は未だ解決されていない (Mitchell, 1974) が、本誌では捕獲したマダライルカと遊泳中観察した体型や体色等からマダライルカと判定した。したがってこれらの内でも捕獲して精査すればアラライルカの特徴を有する個体群も存在していたらろうと考える。分類学上の問題は今後より多くの標本を入手して行う必要がある。赤道以北の海域における本種の発見位置の範囲は 10°16'N ~ 00°02'N の 131°03'E ~ 171°30'E であり、150°E 以西の海域における発見群数 (④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫) に比べて 150°E 以東の海域における本種の群の発見頻度は少ない (⑬⑭)。発見時の表面水温は 28.1 ~ 30.5°C (平均 29.7°C) の範囲にあるが、平均値においてハシナガイルカの場合よりもわずかに高い。

群構成頭数の範囲は 10 ~ 60 頭 (平均 33.1 頭) であり、ハシナガイルカのそれ (66.4 頭) の約半分である。また、親仔を含んだ群は④のみであり、発見群数に対する割合は 12.5% となり、ハシナガイルカの 27.3% と比べて 1/2 以下である。

赤道以南の海域全体で発見されたマダライルカは 5 群 335 頭 (⑬⑭⑮⑯⑰) であり、その内、南太平洋ではマヌス島の北側 (⑬) で 11 月 5 日に表面水温 29.3°C

において1群15頭とナウル島とニューアイルランド島の間位置する 01°54'S, 161°26'E, 表面水温 29.7°Cにおいて親仔を含む1群200頭(㉔)が発見された。㉔の群はブーゲンビル島の北東沖合の 05°01'S, 156°02'Eの表面水温29.1°Cにおいてハンナガイルカと渾然一体となった1群100頭の親仔を含んだ群が発見された。残る2群の内の1群はソロモン海を横断中にそのほぼ中央部㉕において12月5日に1群450頭という極めて巨大なニメゴンドウの群に混って1群50頭の本種が発見された。表面水温は27.8°Cと低い値を示していた。残る1群はオーストラリア北西岸沖合のチモール海とインド洋の境界付近において12月12日表面水温30.1°Cで1群20頭という比較的小さな群㉖とそして㉗の1群10頭のニメゴンドウと同時に1群10頭の本種の群が発見された。赤道以南の海域におけるマダライルカの群構成頭数の範囲は15~200頭(平均67頭)であり、発見海域の表面水温の範囲は27.8~30.1°C(平均29.2°C)であった。平均群構成頭数においては北太平洋のそれの約2倍の大きさであるが、ハンナガイルカの場合には逆に北太平洋の方が赤道以南の海域のそれの約1.4倍と大きい。しかしながら、宮崎・和田(1978)はハンナガイルカとアラリイルカの各々について赤道以北の海域における平均群構成頭数に対する赤道以南の海域におけるその割合は38.1%と28.4%であり、今回のマダライルカの傾向も彼等のものともよく一致するが、今回のハンナガイルカの傾向は全く逆を示しており、今後この問題について、時間的、海域的、そして群の構造等の点からも検討する必要がある。更に彼等は赤道以北の海域において1月下旬と3月中旬に発見したそれぞれ2群と1群の合計3群には親仔が認められなかったと報告しており、また、赤道以南の海域において2月中旬から3月初旬にかけて発見した11群中5群(45.5%)に親仔が含まれていたと記している。今回の調査での赤道以北および以南における親仔を含む群の発見群数に対する割合は各々12.5%と40.0%であり、調査時間が彼等のものと約3か月ずれているが、赤道以南の海域においてはほぼ近い値を示しており、ハンナガイルカでも述べたように、赤道以南と以北においてマダラ(アラリ)イルカの繁殖時期にも何らかの相違が存在するものと考えられる。宮崎・和田(1978)は更に、アラリ(マダラ)イルカの方がハンナガイルカよりもより広範囲に分布していると述べているが、今回の結果はその逆の結果を示しており、将来、捕獲・目視調査を充実・拡大し、資料の蓄積を待って検討する必要がある。

(3) スジイルカ (*Stenela caeruleoalba*)

北太平洋では10月22日に 29°57'N, 128°15'E (㉘)と11月17日に 01°59'N, 160°47'E (㉙)において緯度・経度とも大きく離れた地点で1群30頭と1群50頭の群として発見された。従って、発見時の表面水温も各々26.3°Cと29.4°Cであり、両者の間に約3°Cの差がみられた。また、いずれの群にも親仔は認められなかった。

南太平洋では50頭、10頭として100頭で構成される3群が表面水温28.5~29.8°C(平均29.4°C)の範囲で11月下旬に発見された(㉚㉛㉜)。この群の中で、㉚においては1~2組の親仔が認められた。更に、㉚のある個体に“スピン”行為が観察された。その群の個体の体長は推定できなかったが、相対的な大きさとして小型の個体は大型個体の体長の約70%位であった。これら5群とも体側に明瞭な黒い線が視認されたが、マイルカとの区別は定かではない。なお、ソロモン海、サンゴ海、アラフラ海、チモール海そしてインド洋においては1頭も発見されなかった。

(4) マイルカ (*Delphinus delphis*)

北太平洋において2群のみ発見されたにとどまった。第1群目は10月22日に東支那海の 30°48'N, 128°14'Eにおいて表面水温24.4°Cで1群50頭として㉝、また第2群目は11月9日、ボナベ島の東の 07°00'N, 156°10'Eにおいて1群50頭が表面水温29.9°Cで発見された㉞。

(5) ハンドウイルカ (*Tursiops gilli*)

今航海全体で本種を22群1,294頭(平均群構成頭数は59頭)発見した〔㉟(2群), ㊱(5群), ㊲~㊴(1群), ㊵(2群), ㊶㊷㊸(1群), ㊹(2群)〕。

北太平洋における発見は11月9日に 07°34'N, 154°19'Eにおいて1群120頭のハンナガイルカに混って発見されたのみであり(㊱)、この群は上記の22群の中には入っていない(表面水温は29.5°Cであった)。

南太平洋においてもマヌス島の北西に位置する 01°00'S, 144°30'Eにおいて11月3日に表面水温29.7°Cで2群25頭㊲という比較的小さな群を発見したのと、ナウル島の南西、01°41'S, 161°56'E, 表面水温29.4°Cにおいて5群1,000頭(1群は約200頭と推測された)がSW~NEの潮目に沿って広範囲に分布しているのが発見された。

本種の全発見群数の68.2%に相当する残る15群はオ

ーオーストラリアの北および北西岸に接するアラフラ海、チモール海およびインド洋の $10^{\circ}48'S \sim 16^{\circ}28'S$ の $119^{\circ}54'E \sim 136^{\circ}10'E$ の範囲で発見された (㉔~㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟)。群構成頭数の範囲は5~50頭そして平均群構成頭数は約18頭であり、スジイルカ属と比較して極めて少い頭数である。発見水域における表面水温の範囲は $29.3 \sim 30.8^{\circ}C$ (平均 $30.1^{\circ}C$) であり、この15群中3群に親仔が認められた (㉕㉖㉗)。ハンナガイルカにおいても認められたように、発見群に占める親仔を含む群の割合は南太平洋の0.0% (7群中0群) に対してアラフラ海、チモール海そしてインド洋においては20.0% (15群中3群) と差が見られ、従って、本種においても南太平洋側とインド洋側で繁殖時期に相違があると推察される。推定体長は㉔において2.5m位、㉕㉖㉗では2.5~3.0m、㉘は3m前後、㉙㉚は2m前後、㉛㉜㉝は1.2~1.5m位の小型個体の群として観察され、また仔と考えられる個体は親の体長の60~70%位と推測された。このことから、本種は成長段階によって群を形成するのではないかと推察される。

この他にハンドウイルカ型の群が全航海中に7群30頭目視された (㉞㉟㊱㊲㊳)。㉞は推定体長3.5~4.0mであり、体色は濃灰色であり、頭部の波切りがゴンドウ型ではなくハンドウ型のもので観察された。また、潜水時に尾鰭を上げるのを目視した。㉟の推定体長は2.5~3.5mであり、表面水温 $28.6^{\circ}C$ で小魚群に付いていた。㊱は2m前後の体長で、体色は明灰色、背鰭は比較的大きく立った印象をうけた。これらはハンドウイルカに間違いのないと思われたが、正確を期して別にした。この群の内では㊱はマクロ延縄に沿って発見されたもので、潜水時に尾鰭を上げて潜りしかも比較的潜水時間も長く、何らかの被害をマクロ延縄漁業に与えているのではないかと推察された。

(6) ハナゴンドウ (*Grampus griseus*)

全海域で4群61頭発見され、その群構成頭数の範囲は9~40頭 (平均15.3頭) であった。北太平洋ではニューハノーバー島の北、ボナベ島の西に位置する $07^{\circ}18'N$, $149^{\circ}38'E$ (表面水温 $29.2^{\circ}C$) において11月8日に1群9頭㊴を発見した。

赤道以南の海域では11月5日に表面水温 $29.4^{\circ}C$ においてマヌス島の北側の $01^{\circ}24'S$, $147^{\circ}27'E$ で2群40頭㊵、そしてソロモン海の中央部において12月5日に $11^{\circ}51'S$, $155^{\circ}32'E$ 、表面水温 $27.4^{\circ}C$ の潮目に付いた1群12頭㊶を発見した。これら3群とも比較的遊泳スピードは遅く、ゆったりした泳ぎをしていた。

(7) マゴンドウ (*Globicephala melaena*)

今次調査航海中発見されたマゴンドウ3群53頭 (平均群構成頭数は18頭) は北太平洋においてのみ目視された。10月31日 $00^{\circ}48'N$, $136^{\circ}46'E$ (表面水温 $29.7^{\circ}C$) の NNE—SSW の弱い潮目のところで3頭からなる1群㊷を発見した。次いで、11月24日、 $00^{\circ}21'N$, $166^{\circ}34'E$ (表面水温 $28.7^{\circ}C$) のナウル島の北に位置する地点で30頭と20頭から構成される2群㊸を発見した。発見地点で同時に小魚群が認められ、この小魚群を追いかけていたのではないかと推察された。

(8) オキゴンドウ (*Pseudorca crassidens*)

本種も北太平洋においてのみ発見された。発見された3群42群の内、第1群はボナベ島の西の $07^{\circ}34'N$, $154^{\circ}25'E$ 地点において11月9日に1群30頭 (表面水温 $29.6^{\circ}C$) ㊹として発見された。残る2群の内1群は11月21日に $10^{\circ}09'N$, $171^{\circ}39'E$ で1群7頭㊺、そして残るもう1群は㊻群と同じ日に $10^{\circ}07'N$, $171^{\circ}40'E$ において1群5頭として発見された。これらの発見時の表面水温は $28.1^{\circ}C$ と $28.2^{\circ}C$ であり、㊻の群は追尾後しばらく船尾に付いて遊泳していた。この群の推定体長は5m前後と推定された。

(9) ユメゴンドウ (*Feresa attenuata*)

今航海において4群480頭が目視されたが、いずれも赤道以南の海域であり、その第1群は12月5日に $11^{\circ}58'S$, $155^{\circ}11'E$ 地点において450頭という大きな群を形成していた。この群にはマダライルカ50頭が一緒に混って発見された㊼。発見時の表面水温は $27.8^{\circ}C$ であった。目視時の種の判定は頭部が丸いという特徴、背鰭は比較的大きくそして体側の色調が中央部付近と比較して周辺部よりもより淡いという点に基づいて行った。

他の3群はいずれもオーストラリア北西岸に面したインド洋において12月12日と13日に表面水温が $29.4 \sim 30.1^{\circ}C$ (平均 $29.7^{\circ}C$) の範囲において全て10頭群として発見された㊽㊾㊿。㊽と㊿の群は共に親仔を含んでいた。仔の大きさは親の60~70%位と観察された。㊾群は「種不明イルカ」の中の㊿と㊿のイルカと同じ種類のイルカ (“スピン” 行為がみられた) 1群10頭と一緒に発見された。また㊽は推定体長が3.0~3.5mで体全体を空中に出して跳躍する個体が認められた。本種はアラフラ海やチモール海のように比較的陸や島で囲まれた、浅い海には分布しないのではないかと推察

する。

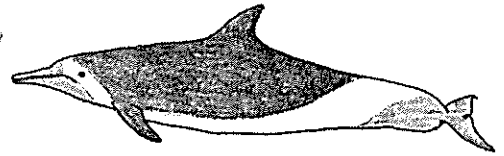
(10) 種不明イルカ

㊸の群は約10頭であったが下長く属の判別もできなかった。㊹は推定体長が2.5~3.0mで3頭からなる小さな群であったが、下が長く種の判別はできなかった。㊺は下の長い20頭からなる群であり、ハンドウイルカかオキゴンドウのいずれかであろう。㊻と㊼は各々2頭と5頭からなる群であり、㊽は下が長く、ほとんど鯨体を水面上に出さなかったが、背鰭の形はハンドウイルカに似ていた。他方、㊾は複雑に入り混った潮目の中で小型マダロ3群と共に発見され、マダロと共に同じ餌を摂餌していた結果下が長くなったのではないかと推察された。㊿と㊽は共に5頭からなる群であり、水面上にほとんど鯨体を出さないで種の判別ができなかったが、ハシナギイルカの体型に似た小型で比較的ほっそりした印象を与えるイルカであった。発見地点に小魚の群が認められたことから、これらの小魚を追い摂餌していたのではないかと推察された。

㊿㊽として㊽の各群は同一種と考えるが、各々12月12日14°32'S, 123°10'Eの表面水温30.3°Cにおいて1群30頭、そして12月13日、17°07'S, 118°47'Eの表面水温29.3°Cにおいて2群200頭が発見された。そして、㊽は12月13日、17°17'S, 118°19'Eの表面水温において1群10頭のニメゴンドウと一緒に本種の1群10頭が同時に発見されたが、種の判定のために追尾すると、ニメゴンドウとこの種不明イルカは別々の集団を作って逃走した。

これら3群に共通して言えることは、遊泳速度が極めて速く、船には付かず、大きなジャンプや追尾当初“スピン”行為をするものもあるが、追尾を続けるとスピードを早めて逃走した。体型はハシナギイルカを大きくした印象を与えた。推定体長は㊿においては2.5~2.8m位で、㊽は大型の個体(2.5~3.0m)と小型個体(2m前後)が混在していた。体色は、メロン中央部より目の後方を通り腋の下から体軸に沿って体側を進み、生殖孔付近から斜め後方に向って背部尾柄

部にかけて白色に近い幅広の灰白色のバンドが走り、その下部および上部はそれぞれ淡い灰色と濃い灰色に



第2図 種不明イルカ㊿㊽㊾の推測体色と体型

色分けされていた(第2図)。尾柄部の上下の高まり(キール)はよく発達している印象をうけた。

第2図に示した想像図の頭部の前半部と尾柄部、尾鰭はほとんど観察時には水中に入っていたので、実際の色調よりも淡く感ずることになり、従って、これらの部分の色は背部と同様に濃灰色であった可能性が強い。我々はこのイルカに対して“アラフライルカ”と命名して区別していたが、捕獲をして是非調べてみたいものと思っている。

全般的に言えることではあるが、低緯度海域における小型歯鯨類の目視による判定は、体型、体色、行動、大きさ、生息水温等に関する資料が不完全であることと地方的種族が多数存在するであろうことなどを考慮すると通常極めて困難であるといえる。

従って、毎回述べるところであるが、これらの海域における小型歯鯨類の捕獲調査をより強力に推進し、分類学的見知からより正確に種の特徴を明らかにすることが必要である。また、多くの小型歯鯨類は船に付かないので鯨種を判定するチャンスも少なく、判別に苦労するが、現場において目視の状況を再現し、より多くの人によって種の判別をより正しくするための一つの改善策としてビデオカメラとビデオレコーダーを調査用具の一つとして用意することも必要であろうし、小型歯鯨類の捕獲には是非とも小型の安定性のあるモーターボートの併用が実現されることを望みたい。最後に、目視調査に並々ならぬ御協力を全航海中にたまわった日本共同捕鯨株式会社第18利丸山下一彦船長はじめ乗組員各位に感謝の意を表します。

附表 小型歯鯨類の発見記録

群番号	発 見				鯨 種	群数/頭数	方 向		水温 (°C)	備 考
	月・日	時・分	緯 度	経 度			遊 泳	逃 走		
①	10・22	09・00	30-48N	128-14E	マイルカ	1/50	150°	150°	24.4	
②	10・22	12・50	29-57N	128-15E	スジイルカ	1/30	180°	180°	26.3	
③	10・27	13・30	05-20N	131-01E	ハシナギイルカ	1/60	180°	180°	30.2	

④	10・27	14・25	05-14N	131-03E	マダライルカ	1/50	160°	160°	30.5	1頭捕獲(標本番号1) 親仔を含む。
⑤	10・27	15・05	05-10N	131-05E	"	1/50	150°	旋回	30.4	
⑥	10・27	16・25	05-01N	131-11E	"	1/10	160°	"	30.2	
⑦	10・31	10・00	00-48N	136-46E	マゴンドウ	1/3	回遊	旋回	29.7	NNE-S SW弱い潮目。
⑧	10・31	14・48	00-37N	137-44E	マダライルカ	1/50	140°	20°	29.8	
⑨	11・1	10・47	00-30N	139-11E	"	1/60	45°	50°	29.4	
⑩	11・2	08・42	00-02N	140-27E	"	1/20	110°	290°	29.3	
⑪	11・3	14・37	01-00S	144-30E	ハンドウイルカ	2/25	100°	100°	29.7	1頭捕獲(標本番号2)
⑫	11・5	07・26	01-26S	147-12E	マダライルカ	1/15	135°	180~ 68°	29.3	
⑬	11・5	08・41	01-24S	147-22E	ハンナガイルカ	1/30	180°	旋回	29.4	1頭捕獲(標本番号3)
⑭	11・5	09・20	01-24S	147-27E	ハナゴンドウ	2/40	120°	旋回~ 90°	29.4	
⑮	11・6	08・28	02-59N	149-24E	ハンナガイルカ	1/30	270°	旋回~ 190°	29.5	1頭捕獲(標本番号4) 付近に弱い潮目。
⑯	11・7	06・45	04-27N	149-54E	"	1/20	225°	225°	29.3	1頭捕獲(標本番号5)
⑰	11・7	08・44	04-48N	149-45E	"	1/100	45°	360°	29.4	2頭捕獲(標本番号6,7) 鳥付カツオ群。E-Wの潮目。
⑱	11・7	10・40	05-06N	149-41E	<i>Stenella</i> sp.	1/10	330°	240°	29.5	吻はハンナガイルカほど長くない。
⑲	11・8	07・23	06-46N	149-24E	"	1/6	220°	220°	29.1	背鰭は比較的大きく、後方に傾いている。
⑳	11・8	10・20	07-18N	149-38E	ハナゴンドウ	1/9	20°	20°	29.2	噴気が認められ、ゆっくり遊泳していた。
㉑	11・9	07・55	07-34N	154-19E	ハンナガイルカ	1/120	30°	30°	29.5	ハンドウイルカ混っていた。親仔多い。海鳥わづか。
㉒	11・9	08・23	07-34N	154-25E	オキゴンドウ	1/30	90°	90°	29.6	
㉓	11・9	17・16	07-00N	156-10E	マイルカ	1/50	90°	旋回	29.9	体側模様あざやか。 体高やや高い。
㉔	11・16	10・50	03-31N	156-23E	アカボウクジラ	1/2	—	—	—	
㉕	11・16	18・03	02-13N	156-42E	マダライルカ	1/10	45°	45°	29.5	全身暗灰色に見えた。 足早い。
㉖	11・17	16・24	01-56N	160-43E	ハンナガイルカ	1/100	70°	70°	29.4	腹部白色明瞭。 親仔含む。
㉗	11・17	16・47	01-59N	160-47E	スジイルカ	1/50	315°	270°	29.4	やや細身、体側模様明瞭。 腹部白色。
㉘	11・21	08・19	10-16N	171-30E	マダライルカ	1/15	60°	40°	28.1	全身暗灰色。スピン行為が認められた。ハンナガイルカかもしれない。
㉙	11・21	09・19	10-09N	171-39E	オキゴンドウ	1/7	160°	180°	28.1	体長5m前後、船尾に付く。
㉚	11・21	10・39	10-07N	171-40E	"	1/5	80°	50°	28.2	
㉛	11・23	14・37	02-01N	169-41E	ハンナガイルカ	1/50	180°	180°	28.5	腹部白色明瞭。 追尾当初スピンする。
㉜	11・23	15・07	01-58N	169-35E	"	1/50	225°	225°	28.5	腹部白色明瞭。仔連数組。 追尾当初スピンする。
㉝	11・24	07・03	00-27N	166-47E	"	1/120	260°	260°	28.6	腹部白色認められた。 付近にカツオ群。
㉞	11・24	08・09	00-21N	166-34E	マゴンドウ	2/30 20	回遊	回遊	28.7	小魚付き。
㉟	11・24	13・07	00-05N	165-45E	ハンナガイルカ	1/30	240°	245°	29.0	腹部白色が認められた。 吻端が白ぼく感じられた。
㊱	11・24	13・43	00-03N	165-39E	"	1/50	210°	210°	29.2	腹部白色が認められた。 吻端が白ぼく感じられた。 全体として大型。

③7	11・24	16・19	00-12 S	165-08 E	<i>Tursiops</i> sp.	3/8	240°	旋回	29.2	体長は3.5~4.0m, 体色は黒っぽい, 潜水時に尾鰭を上げる。頭部の波切りはゴンドウ型ではなくハンドウ型付近に延縄用パイを見た。
③8	11・25	06・40	01-35 S	162-07 E	ハシナガイルカ	1/20	120°	270°	29.5	腹部白色, スピンする。
③9	11・25	07・33	01-41 S	161-56 E	ハンドウイルカ	5/1000	150°	旋回	29.4	SW-NEの潮目に沿って広範囲に分布していた。1群の平均は200頭位であった。
④0	11・25	08・49	01-47 S	161-44 E	不明	1/10	250°	250°	29.6	下長く見失なう。
④1	11・25	10・20	01-54 S	161-26 E	マダライルカ	1/200	280°	280°	29.7	腹部はやや黒っぽい色を呈している。2頭連れが多く(親子), 片方は他方の体長の約80%位の大きさ。
④2	11・25	10・59	01-57 S	161-18 E	スジイルカ	1/50	110°	110°	29.8	大小の個体が混り, 小は大の約70%位の体長。スピンするもの2例認められた。腹部は灰白色。
④3	11・25	15・55	02-16 S	160-20 E	"	1/10	250°	250°	29.8	1~2組の親子群, 体色のスジ確認。白色部はややピンク色を帯びていた。
④4	11・27	15・15	05-01 S	156-02 E	マダラとハシナガイルカ混在	1/100	10°	旋回	29.1	追尾当初スピンする。親子数組あり。体色黒っぽいものと, 明るいものの2通りの体色が観察された。
④5	11・28	08・53	05-55 S	156-53 E	ハシナカイルカ	1/130	180°	200°	29.3	腹部白色明瞭。
④6	11・29	11・58	07-30 S	160-00 E	スジイルカ	1/100	45°	180°	28.5	体側に明瞭なスジを確認する。マイルカとの判別は出来なかった。
④7	12・5	12・45	11-51 S	155-32 E	ハナゴンドウ	1/12	180°	180°	27.4	潮目に付いていた。
④8	12・5	14・25	11-58 S	155-11 E	ユメゴンドウ	1/500	180°	180°	27.8	全身黒っぽいハシナガイルカ1群50頭が共に観察された。頭部は丸く, 背鰭は比較的大きく, 体側は淡灰色。
④9	12・8	15・17	10-45 S	141-05 E	<i>Tursiops</i> sp.	1/5	180°	回遊	28.6	体長は2.5~3.5mで, 大小が混っていた。小魚付き。
⑤0	12・8	16・00	10-45 S	140-56 E	"	1/6	45°	旋回	28.5	体長は2m前後, 体色は明灰色, 背鰭は比較的大きく立った感じとがっている。
⑤1	12・9	06・15	10-46 S	138-04 E	<i>Tursiops</i> sp.	1/10	18°	旋回	28.8	"
⑤2	12・9	12・00	10-43 S	136-52 E	不明	1/3	225°	旋回	29.5	2.5~3.0m位の大きさ。下長い。
⑤3	12・9	15・12	10-50 S	136-11 E	<i>Tursiops</i> sp.	1/1	45°	旋回	30.0	
⑤4	12・9	15・30	10-50 S	136-10 E	ハンドウイルカ	1/6	不明	旋回	30.0	親子2組を含む, 仔の体長は親の0.6~0.7%, 体色明灰色, 親は肥満度高い。
⑤5	12・9	16・30	10-48 S	136-04 E	"	1/6	270°	旋回	30.1	体長は2.5m位, 群は同一体長で構成されている。体色は明灰色。
⑤6	12・9	17・58	10-48 S	135-44 E	"	1/15	270°	270°	29.8	船に付く。体長は2.5~3.0m, 体色は背部濃灰色であるが腹部は淡灰色, 吻端白っぽい。
⑤7	12・10	07・16	10-49 S	132-46 E	"	1/10	270°	—	29.8	船に付く, 体長は2.5~3.0m, ビー, ビーと鳴く。
⑤8	12・10	07・43	10-48 S	132-40 E	"	1/7	315°	旋回	29.8	体長は2m位, 背鰭は鋭い小型鎌状。
⑤9	12・10	10・50	10-48 S	132-01 E	"	1/14	回遊	—	30.2	船に付く, 大きい個体は約3m, 小さい個体は1.2~1.5m, 親子2組。

鯨 研 通 信

⑥0	12・10	13・12	10-49 S	131-28 E	ハンドウイルカ	1/20	回遊	回遊	30.8	比較的小型のもので群が形成されていた。船に付かなかった。
⑥1	12・10	13・35	10-49 S	131-23 E	"	2/5	回遊	回遊	30.8	体長は2m前後、群はほぼ同一の体長の個体で構成されていた。体色は比較的明るい。
⑥2	12・10	16・39	10-49 S	130-47 E	不明	1/20	回遊	回遊	31.4	ハンドウカオキゴンドラ。下長い。
⑥3	12・10	17・15	10-48 S	130-42 E	"	1/2	回遊	回遊	31.5	下長、背鰭はハンドウイルカ型。
⑥4	12・10	18・15	10-51 S	130-35 S	"	1/5	回遊	—	31.4	潮目多し、小型マダロ群付近に3群。
⑥5	12・11	05・50	11-49 S	128-18 E	ハンドウイルカ	1/5	270°	旋回	30.0	体長2m以下。
⑥6	12・11	09・37	12-10 S	127-37 E	ハシナガイルカ	3/200	315°	回遊	30.2	親仔数組。
⑥7	12・11	16・20	12-46 S	126-27 E	ハンドウイルカ	1/20	45°	旋回	30.2	船に付かず。
⑥8	12・11	17・27	12-10 S	126-20 E	不明	1/5	—	—	30.2	小型で比較的ほっそりとしたイルカ。
⑥9	12・11	18・00	12-53 S	126-15 E	"	1/5	—	—	30.1	小型イルカ。付近に小魚群。
⑦0	12・12	08・24	14-17 S	123-36 E	ハシナガイルカ	1/20	回遊	遊回	29.8	親仔数組。背部と腹部の明暗明瞭(腹部淡色)。
⑦1	12・12	09・34	14-25 S	123-25 E	ヌメゴンドウ	1/10	310°	310°~250°	30.1	親仔4組、親仔の体長比1:0.6~0.7、背鰭鋭くとなる。船上ではヌメゴンドウと判定していた。
⑦2	12・12	09・34	14-25 S	123-25 E	マダライルカ	1/20	310°	310°~250°	30.1	群番号71と同一群として発見された。体色は全身黒っぽい。群番号71、72共にトビウオ追尾中。
⑦3	12・12	10・48	14-30 S	123-13 E	ハンドウイルカ	1/6	113°	—	30.3	船首に付く。体長は3m前後。
⑦4	12・12	11・05	14-32 S	123-10 E	?	1/30	90°	—	30.3	体長は2.5~2.8m、体色は別に記載する。遊泳スピード速い。大きなジャンプをする。アラフライルカ。
⑦5	12・12	12・11	14-35 S	123-00 E	ハンドウイルカ	1/50	270°	—	30.8	船に付く。体長2.5~3.0m位。
⑦6	12・12	15・48	14-51 S	122-31 E	ハシナガイルカ	1/30	45°	旋回	30.0	親仔数組、体色は全体的には淡灰色であるが、腹部は背部よりもより淡い色である。親仔以外は小型。
⑦7	12・12	16・52	15-02 S	122-11 E	"	1/6	180°	225°	30.1	親仔1組、腹部は明色。背部と腹部の体色明瞭に区別された。
⑦8	12・13	06・00	16-28 S	119-54 E	ハンドウイルカ	2/100	270°	270°	29.3	親仔を含む、体下面全体は背部よりも白に近い明るい灰色。
⑦9	12・13	12・18	17-07 S	118-47 E	? イルカ	2/200	360°	回遊	29.3	群番号74と同一種、追尾当初スピンのものあり。体長は大きいもので2.5~3.0m、小さいもので2m位。
⑧0	12・13	14・55	17-17 S	118-19 E	ヌメゴンドウ ? イルカ	2/10	315°	旋回	29.4	親仔群を含む。ヌメゴンドウはハナゴンドウかもしれない。追尾当初スピンのものあり。
⑧1	12・13	18・31	17-29 S	117-47 E	ヌメゴンドウ	1/10	回遊	回遊	29.8	ハナゴンドウかもしれない。体長3~3.5m、体全体を空中に出して跳躍する。胸鰭長くない。
⑧2	12・15	18・40	25-23 S	112-00 E	ハシナガイルカ	1/40	360°	—	23.4	船に付く、スピンする。腹部白ぼく背部との境界は明瞭。